

# 横瀬浦で出土した白磁Ⅹ-1D類が示す時代背景 — 生活の痕跡はどのくらい遡るのだろうか —

1. はじめに
2. 白磁（Ⅹ-1D類）が出土する時代背景
3. 肥前と薩摩・南海をつなぐ伊佐平氏
4. おわりにかえて

一般社団法人西海文化財研究所 村川 逸朗

# はじめに

- ▶ 前回の調査（長崎国際大学博物館学芸員課程・一般社団法人西海文化財研究所2021）で建物跡の柱穴から出土した炭化物をC14年代測定にかけたところ1420年代の衡正值が出た。
- ▶ この横瀬浦がポルトガル船の来航により繁栄した1562年より古い時代から生活が営まれていたことが分かった。
- ▶ 今回の調査では、それより古いE期（13世紀中葉～終わり、山本信夫2000）の中国製貿易陶磁器である白磁皿（太宰府編年：IX - 1d類）が出土したことにより、さらに年代的百年以上遡ることになった。
- ▶ この横瀬浦の発掘調査は昨年より始まったが、まだ本格的な解明は緒に付いたばかりで、もっと古い出土遺物が確認されるかもしれない。



長崎の原風景  
(丸山・思案  
橋等)



調査個所

# 長崎国際大学博物館学芸員課程学生の発掘状況





# 横瀬浦と長崎県の海に関する研究動向



写真1 横瀬浦出土の (IX-1d類) 白磁皿



写真2 竹松遺跡出土朝鮮半島産無釉陶器とカムイヤキ (左下)



・長崎県教育委員会の調査による新幹線車両基地関係の発掘調査（長崎県教育委員会2019）によって、カムイヤキと高麗産（朝鮮半島産）無釉陶器が出土した。

・南島社会との南北方向の仲介貿易の新たな様相が考古学的な資料で確認されることとなった。

・田中健夫氏などの文献の研究者によって示唆されていた、松浦半島の志佐氏などに代表される西北九州の勢力による、高麗・朝鮮王朝と南島社会との間の仲介貿易（竹内理三・瀬野誠一郎・田中健夫 1980）であり、宋・元と中世日本との間で、博多が窓口となる東西の交易ルートと並立する、縦の交易ルートの裏付けでもある。

・最近の中世考古学の研究が進むなかで、海流が関係するこのような西北九州の海の交易ルートのことを真剣に考える必要性も生じてきているのではないかと考えるようになった。

・薩摩塔の分布（高津ほか2010・井形進2012・田中史生2022）など、おぼろげな歴史像の輪郭は見えきており、いくつかの傍証となる出土資料で検証する段階。

## 2. 白磁（Ⅸ - 1D類）が出土する時代背景



『青方文書』に見える志佐氏や、奈留氏が関係した事例で、「関東使者義首座注進状案 唐船破損間事」（永仁6年；1298年渡唐船の遭難事例）がある。

時代背景としては文永弘安の役とその後の交易をおこなっていた鎌倉時代の激動の時期にあたるのではないかとと思われる。この期間内の海難事件としては、『青方文書』に見える志佐氏や、奈留氏が関係した事例で、「関東使者義首座注進状案 唐船破損間事」（永仁6年；1298年渡唐船の遭難事例）がある。なお、この海難事件があった1年前の永仁5年銘の五輪塔が川棚にある（川棚町郷土資料館所蔵）。銘文中に真言密教を表す（大日如来）と念仏（南無阿弥陀仏）が併記されている。

### 3. 肥前と薩摩・南海をつなぐ伊佐平氏



写真3 永仁五年銘石塔



図2 肥前平氏系譜  
(野口 1994)

この海難事件があった1年前の永仁5年銘の五輪塔が川棚にある（川棚町郷土資料館所蔵）。銘文中に真言密教を表す（大日如来）と念仏（南無阿弥陀仏）が併記されており、「源長盛の後家」が自らの死後の冥福を祈る逆修碑である。長崎県内の逆修碑として最古の事例であり、西彼杵半島産の緑色凝灰岩が石塔の素材として鎌倉後期から流通していたことを示す確実な事例としても注目される（大石 2014）。西彼杵半島と大村湾内との密接なつながりが石造文化でも示されている。

さて、真言密教と念仏の融合を推し進めたのは根来寺の創建者である覚鑿（かくばん）で、覚鑿は、肥前国藤津荘（現佐賀県鹿島市）出身で、嘉保2年（1095年）に伊佐平次兼元の三男として生まれた。真言宗を代表する学僧であり、紀伊の根来寺の開祖でもある。『五輪九字明秘密釈』の撰述により、五輪塔の理論的組織者としても知られる。次節では、伊佐平次兼元の系譜について大宰府との関係もみながら考えてみたい。

出土遺物の面から朝鮮半島～大村湾沿岸～薩摩西部～奄美諸島～琉球諸島とつながる交易ルートが復元される（長崎県考古学会 2016）。

古文献の除目史料や「指宿氏略譜」では、11世紀後半に相当する人物として、九州内の行政監察に当たる官職である太宰権小監の伊佐兼重・兼時親子がいる。その後、12世紀前期には、同じく伊佐平氏の系譜につながる島津庄開墾者の平季基と薩摩国郡司良道の兄弟が現れる。良道の娘（三女）の婿として彼杵久純の名も確認できる。

良道の子の阿多忠景は薩摩一国と周辺を支配するも、勅勘を受けて喜界島に逃れ（『吾妻鏡』）、久純の子で忠景の娘婿の宣澄（=重澄）が支配権を継承する。

これらの考古学的事象・文献史料から、朝鮮半島～大村湾沿岸～薩摩西部～奄美諸島～琉球諸島とつながる交易ルートが、大宰府を掌握して日宋貿易を振興した平氏政権の対外交易の基盤となったことが分かる（野口に実 1994・堀内 2016）。

# 4. おわりにかえて



竹松遺跡出土の『木都』記名紡錘車を国立歴史民俗博物館の平川南館長[当時]や武井紀子氏らに見ていただいた時に、「木」は「き」と発音し「城」の文字をあてることもあるし、「都」は「つ」と発音し、おそらく「津」の文字を充てて、「そのきのつ」、すなわち彼杵郡の郡津という意味だろうとのことであった。白村江から数百年の年月をかけ、竹松遺跡が対外交易拠点となった可能性があり、先述のように、横瀬浦を含む西彼杵半島北部から五島列島を含む海域も、中央勢力による対外交易に五島列島の勢力が大きく介入する抗争の舞台となっていた。元寇から十数年足らずの経過で、横瀬浦もまた、東シナ海での交易の一翼を担う地となったことも考えられる。



# 竹松遺跡周辺の遺跡（北側）

